

座談会

問われる子どもの学びの質と「学力」

編集部

「学力向上」をめざして県教委が実施しているWeb配信問題（Webテスト）は、むしろ学びの質が阻害されているのではないかと言われている。現場はそのテストでより忙しさが増し、子どもとのかかわりが減って、学び以前の様々な問題行動が起きて、それに追われる日々とも聞いている。

編集部は、これまで子どもの学習の実態を見ようとする努力が弱かったと反省し、今回、小学校・中学校および大学教員の方々に、子どもたちの「学び」の質に関わってWeb配信問題のなかに問題なのか、現場の状況をありのままに語ってもらった。編集部

司会（編集部） Web配信事業は学校でどのように行

われていますか。その関連で子どもの様子や職場はどうですか。

A（小学校教員） 子どもたちに「この1年間でいちばんつらかったのは」というアンケートをとったら、全国学力テストがクラスの半分も占めた。Webテストは県からは国語のテストがあり、市からは算数のテストがありで、月二回は必ずある。年中、テスト、テストという感じです。結果をふまえて、校長が「また、やらせてください」と言ってくる。テスト、テスト、テストで終わっている。採点自体は簡単だが、結果について校長があれこれ言うってくるので、心理的な負担になる。

B（中学校教員） 中学校も小学校と基本的に同じで、水曜に国語、木曜に数学、金曜に理科のWebテストをやっている。県のテストも、市のテストも全部やっている。数学の教員はあらかじめ問題を出して、授業中にやっている。Webテストがあると、30人、生徒が学校に来ない。問題ができないので、その時間は来ない。採点は生徒にやらせている。「これ、成績に入るの？」と生徒が聞く。私は成績は問題にしていない。

司会 過去問（以前の全国学力テストなどに出た問題）を、いっぱいやらせて、学力テストの成績を上げようとしていた動きがあった。Webテストは授業改善につながるというが、現場の教師は勤務評定につながるのではないかと、過剰に反応せざるをえない。その辺は如何でしょう。

C（大学教員） 今までの話とは少し違い、教員が血眼になって（ならされている）状況を紹介する。A市のある中学では、英語の先生が、独自にWebテストの予想問題を作成し、前の週末にやらせることが慣例化している。問題を作成したその先生は、予想問題

が的中してもできばえの良くない生徒たちに、心底怒りを感じると語っていた。そうした学校ではWebテストの結果も、教員の自己評価シートにリンクしている。あの子らのせいで、自己の評価が下がるといふ発想になってしまう。AさんやBさんのように、Webテストを批判的に見ている教員よりも、こうした姿が県内の教員の主流ではないだろうか。

司会 Webテストは過重負担で、時間外労働になる。県の場合、成績の結果を入力するために時間がとられる。県があり、市があり、その他の学力テストがあり、これらの成績処理が過重になってきている。それが「学びの質」の面では、どうでしょうか。

A 校長が「Webの結果を教えてください」と言ってくる。「あんたのクラス、どうなんか」と聞いてくるが、（余計なお世話）、プレッシャーのように感じる。校長は全国学力テストの結果を受けて、「授業の工夫をしないさい」と指示する。非常に窮屈だ。そのテストのために授業をしているのではない。私なりに目の前の子

どもらに最もふさわしい組み立てでやっているのに。

**司会** やりたいことがとばされて、上から別の授業を押しつけられているということですか。

**B** テストだけに関わらないが、中学は非常に低学力。小学生レベルの分数計算ができない子がいる。分数の足し算はできるが、引き算ができない。授業についていけないので、よく眠る。こわい先生の時には眠る。やさしい先生の時には騒ぐ。大きな問題だ。いまは受験シーズンだが、真剣に取り組むというそんな雰囲気はない。生徒はワークブックの問題をすることが勉強だと思っている。ワークの問題が出ないとテスト勉強だとは思わない。低学力で、高校入試をどうするかということがあり、大変だ。「教師の質だけの問題ではないでしょう」と校長はいう。その地域の教育水準が子どもらの学力の水準と関わっているという指摘です。子どもの学力問題は避けて通れない。テストだけの問題でなく、真剣に考えないといけない。

**司会** 授業が、本来の子どもの学びから逸脱している。

管理的なすすめ方に問題がある。そのような中で校長や主幹教員のいうとおりにやればいいという感じもある。

**A** 小学生の中学校への体験入学があった。授業体験や、部活体験もあったが、算数の図形の授業を児童はすごく喜んだ。子どもも大変な部分もあるが、工夫した授業もできるのでないか。子どもも参加できる授業を検討する必要がある。

**司会** ある小学校では、4人もの教員が健康面に支障をきたして休職している。

**B** 小学校も高学年になると、思春期前期の問題行動が頻発して、大変らしいですね。授業中に教室から外へ飛び出してしまふ。校外に出たらそれこそ事故のおそれもあるし、その対応だけでも人手が足りない。教室には教頭さんと事務職員しかいないことがある。

**A** あとで聞くと、カッとなつて友達とトラブルを起こし、飛び出したというような、私から見ればそんなことで、と思う些細ないきちがいが彼らには重大な

ことがら。授業が分からなくて耐えられないという面もある。

B ある小学校は、6年生が大変で、いじめの問題もあるし、教員が精神的に病んでしまったときいている。

A 担任を引き受けて、クラスの問題が起きると去年まではなんともなかったよ」と言われるのが、いちばんつらい。おまえの学級経営が悪いからだと聞かえるから。でも、子どもらは思春期の激しい成長の最中であり、どうしたらいいか、試行錯誤の繰り返しである。B 中学校では、「あの先生が悪いから」となる。子どもの多面的な激動の姿を大勢でゆつくりと見てやる余裕がなくなっている。

司会 学びの質どころではない。その場にいるのが苦痛。テストだけだと、評価されない子は居場所がなくなるし、おもしろくなくなる。教員も管理職がやれと言っても、やっていられない気持ちになる。

A 校長がワークテストの結果を見て、「6年生がひどい。事前に問題をやらせたらどうだ?」と言ってくる。「学力が低いし」と、すぐ上から押しつける形に

なる。校長もその点数で評価されているのだろう。子どもを多面的に見ることが出来なくされている。

C 先ほどからWebテストや学力テストの体制に絡めて議論が進んでいるが、実は、子どもたちが授業や学習そのものに参加してこない実態は、一九九〇年代から深刻化していたのではないか。学校が提供する学び自体が、子どもとすれ違っているという印象がある。かつて子どもの主体的な参加を促すために「全員発言」に取り組むという実践が広がった時代もあったが、みんなが手を挙げれば、それがいい授業なのか、そうしたところから問い直す必要がある。Webテストだけのせいじゃない。

B テスト体制は、子どもの実態を無視している。子どもの主体性の開発をどうするのか。子どもの実態は大きく変容しているから、マニュアルどおりにはいかない。習得型の授業から活用型の授業へといわれるが、A問題（学力テストの基礎的問題）とかB問題（基礎的知識をふまえた応用問題）とかじゃなしに、授業の中心について討論・探求しなければならない。そのことが今、問われている。

A 子ども自身が授業がおもしろいという実感がわか

ない。教員もわからない。おもしろい授業をできる余裕がない。

C 二年前に、座談会の出席者であるBさんの授業を見せていただいた。「落ち着かない一年生」で「教えこみの授業だよ」ということだった。確かにいろいろな生徒がいたが、その授業では教師と生徒の言葉のキャッチボールが絶えない、常に応答的に授業が進んでいるというところが印象的だった。一年後にまた見せていただいたら、子どもたちがずいぶん難しい歴史のテーマに一生懸命取り組み、進んで議論し合う姿があり、一年間でこんなにも成長するのかと驚いた。彼らの成長を引き出す鍵は、授業における対話であったと考ええる。教師と生徒、そして生徒同士、それが授業を変える切り口になる。

司会 子どもたちが、授業に参加しているという気持ちになってきているということでしょうか。ある校長が「一斉授業では、わかる子はわかるが、わからない子は取り残されていく」と言っていた。授業に参加することの意味を考えなければならない。

C 子どもの「学び合い」を重視する取り組みに、新潟県でも広がりを見せている「学びの共同体」の実践がある。学習院大の佐藤孝氏が提唱しているものである。「習熟度別学習」や「学力テスト至上主義」を否定し、子どもたちの「学び合い」を学校改革の柱に据える方向性には大いに共感するが、実践的には授業の中心となる「ジャンプ課題」が個々の教師の力量に負うことなどが問題だと感じる。またこの実践の広がりには「テストの数値」が上がることに各学校が飛びついているという側面もある。佐藤氏が「カギは校長にある」として、「トップダウン」を当然としているところにも問題を感じる。

B 先生の授業では「この授業では、自分の思うことを感ずることをしゃべってもいいのだ」「どんなことを表現しても、向き合ってもらえる」という信頼感が感じられた。机をどういう形にするか、などの方式を上から下ろすのではなく、ボトムアップで教師と生徒が授業を通して、「意見を出し合う楽しさ」「みんなで課題を探究するおもしろさ」を味わうような時間・空間を増やしていかないと根本的な問題状況は変わっていない。

司会 数値を上げる方法で、過去問題をやらせたり、ノウハウを教えたりするのは問題がある。授業の中心が問われる。暗記ものには強いが、独創的なことや考えることは身につけていない。

D (編集部) 私はこれまで受け身の立場で教育を受けてきた。自分で進んで、探究する態度が育てられていない。大学に入ったら、これまでの学ぶ姿勢がふつとんでしまう。自ら学びの質を高めるような授業を受けていけば、そうならなかったのではないか。高校は課題研究や調べ学習があるが、そういう時は自ら設定した課題を真剣にやり、学習は身につく。小学校、中学校ではそんなことはできないのでしょうか。小学校ではどうですか。

A 国語の授業で、教科書の記述に沿ってどういう授業を組み立てるかを追求するが、やらせになってしまいうことがある。

司会 「自分で決めて」、は、なかなかない。次々にやらなければならないことがあるので、そうノンビリしてられない。学び方を学ばせることが必要で、そう

しないと詰め込みになってしまう。

A 調べ学習は理科や社会で、あれを調べよ、これを調べよとやらせているが、教師の目を盗んで、「AK B48はどうのなんの」と調べる子も出てくる。

D 県教委の指導方針では、テストと課題研究がバランスのとれるようにすすめているといいますが。

A 課題研究を模造紙にまとめて発表させることもやっているが、なんか、授業が楽しくない。

B 新自由主義の授業が進んでいる。教師がいいと思うものだけを生徒に与えてきたのではないか。全員が手を挙げればいいのか、課題研究をやればいいのか。

しかし、子どもたちは耕されていない。子どもは、自分たちで調べたい、学習したいと発信している。それを教師がどう受け止めるかが問われている。

A 子どもが一瞬でもいいから集中するということが欠けている。やらされている勉強で終わっている。あれだけ喜んで理科実験にとり組んでいても、テストをやってみると「なんじゃこれは」という低い結果が出る。中学校では子どもと教師の関係はどうですか。

B 子どもはわかりたいと思っている。どんな子でも

高校はいきたいと思っっている。それにどう応えて授業をつくっていくかがポイントだが、教員が忙しいから対応する余裕がない。

C 子どもたちが全く学びから撤退しているかといえば、そうではない。つまりが深刻な子どもでも、マントーマンで応答を大切にしながらやると、課題に向き合おうとする。しかし全体指導になるとできないし、取り組もうとしない。一方的に板書されたらもうお手上げである。いろいろな授業で同じことが起こっている。幼い頃から今まで、そうした大人との関係を奪われてきたことに想像力を働かせ、子どもたちに寄り添ってその機会を保障するという視点がないままでは、学力の向上はない。

B 子どもが小さい時に、親がそばにいてやるとか、そういう経験がない。勉強というと、答えの丸写しと書いている。「答えをくれ」、「答えをくれ」と言う。

司会 正しい答えを書くことが勉強だと思っっている。

D 自立援助ホーム（15〜19歳が対象）の職員に対するアンケート調査（河台純「新潟子ども医療専門学校」）

によると、家に帰ってホツとするのはなにかと職員が生徒に聞くと、「こはんがある」「『おかえり』といってくれる」「食事を一緒にする」があげられている。

また、大切にされていると感じるのはどんなときかは、「ふとんをかけてくれる」「きょうだい、おそろいの服がある」「旅行に行く」などをあげている。子どものそばに親が常にいることが大切だと指摘する。

まずは、教師も親も子どものそばにいてやることから、ということでしょうか。今日は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

（注）

Web配信問題とは、全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査や全県学力調査の問題を参考に県教委が作成して学校にインターネットで配信しているテスト形式の問題

（文責・所員、小野塚恒男）